

島根県における如来 (Tathagata) 像の考察

天 野 茂 時

一、はじめに

日本美術史の研究をはじめてから、かなりの年数を経た。その研究の中で、特に仏教美術、わけても仏像彫刻の研究に着手してから、十数年を経過したが、いよいよ自信がなくなってくる。このことは、仏像彫刻の研究が、奥深いことを意味している。始めは日本美術史の立場から研究を進めたが、ついに仏像のそれぞれの本誓を調べ、続いて仏教の宗派的立場から仏像を考えるに至ったので、研究は広くなっていくだけで、さて、まとめて見たいとペンを執ると、つきなみなものになってしまふ。

私が昨年までに発表した仏像に関するものは、

- 。出雲国 (島根県) の 仏像彫刻、昭和二八、
- 。日本美術史 女性的美の根源とその内容、昭和三〇
- 。出雲地方 貞観期仏像彫刻の様式、昭和三二
- 。日本美術史 白鳳時代の様式と鰐淵寺観音菩薩像について、昭和三五
- 。日本美術史 鎌倉時代の様式と赤穴八幡宮神像の研究、昭和三六
- 。日本美術史 鎌倉時代に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

中学校社会科 美術文化の考察 (飛鳥—鎌倉)、昭和三八

日本史教科書の 美術文化の考察 (室町—江戸)、昭和三九

中学校教科書の 出雲地方に 貞観仏 (出雲様) について、昭和四〇

出雲地方に 藤原仏について、昭和四一

於ける 鎌倉仏について、昭和四二

出雲地方に 鎌倉仏について、昭和四二

於ける 島根県に 観音菩薩像の考察、昭和四二

である。以上を研究紀要及び文化財報告書に発表したのが、再読してみると、未熟な箇所が多いのに驚く。しかし赤面する箇所が発見できることは、いさかでも私の研究が、成長したと自分自身を慰めても見るが、道は遙かに遠い。

昨年は観音像について発表を終ったが、その時から如来像について、各面から掘り上げて見たいと準備をすすめたところ、幸い島根県の如来像で、文化財指定済の中に、四如来、即ち釈迦、阿弥陀、葉師、大日如来があり、それらについて、各如来の本誓はもとより、その起源、信仰の状態、宗派との関係、そして美術史の立場からも考察

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

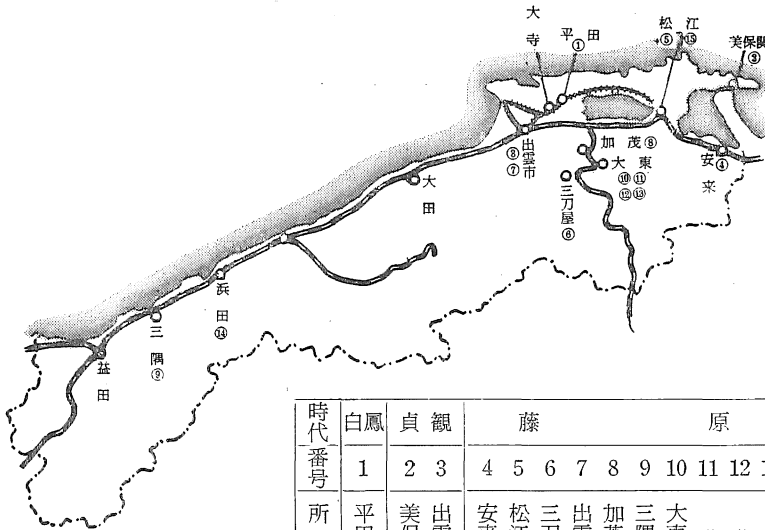
することにした。しかし頁数の制限のため、充分に意をつくすことはできないが、何か今後の研究資料にもなれば幸いであると、それを念願しつつペンを執った。

島根県に於ける如来像は左記を中心として考察した。

番号	仏 像 名	指 定 年 月 日	時 代	管 理 者
1	金銅如来形立像	昭四二、五、三〇	白鳳時代	平田市 鱈淵寺
2	木造薬師如来坐像	大九、四、一五	貞観時代	美保関町 仏谷寺
3	木造薬師如来坐像	明三五、七、二二	全 右	出雲市 万福寺
4	木造阿弥陀如来坐像	明三五、七、二二	藤原時代	安来市 清水寺
5	木造薬師如来坐像	昭三五、七、三二	全 右	松江市 華藏寺
6	木造阿弥陀如来坐像	昭三五、九、三〇	全 右	三刀屋町 禅定寺
7	木造阿弥陀如来坐像	昭四一、五、三〇	全 右	出雲市 極楽寺
8	木造薬師如来坐像	昭四一、五、三〇	全 右	加茂町 富貴寺
9	木造薬師如来坐像	昭四三、五、三〇	全 右	三隅町 正法寺
10	木造大日如来坐像	昭三五、九、三〇	全 右	大東町 極楽寺
11	木造如来形坐像	全 右	全 右	全 右
12	全 右	全 右	全 右	全 右
13	全 右	全 右	全 右	全 右
14	木造阿弥陀如来立像	大九、四、一五	鎌倉時代	浜田市 心覚院
15	銅造阿弥陀如来立像	昭三九、一、二八	全 右	松江市 善光寺

備考 ○印は重要文化財、他は県指定文化財

以上十五軀の分布を左図に示す。



時代 番号	白鳳		貞観		藤原									鎌倉	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
所在地	平田市	美保関町	出雲市	安来市	松江市	三刀屋町	出雲市	加茂町	三隅町	大東町	"	"	"	浜田市	松江市
寺名	鱈淵寺	仏谷寺	万福寺	清水寺	華藏寺	禅定寺	極楽寺	富貴寺	正法寺	極楽寺	"	"	"	心覚院	善光寺

二、如来の意義と如来像の特色

(一) 如来 (Tathagata) の意義

仏陀 (Buddha) の称号として、多く用いられるのがタターガタ (Tathagata) 即ち多陀伽多、多陀阿伽度、怛他薩多であつて、インドには早くからあつた語であるが、この語の意味は必ずしも明瞭ではなからぬ。

タター (Tatha) とガタ (gata) とに分解して「その如くすぎ去れるもの」(如志)とみると、過去の仏陀たちと同じ道を歩んだもの、という意味に解釈される。またタター (tatha) とアガタ (agata) とに分解すれば「あるべきように道を歩んでこの世にあらわれてきたもの」という意味にもなる。漢訳では、この意味から「如より来生したもの」即ち「真如来生」を略して「如来」としたもので、「真如」は、真実の意味であるから、真実の世界から生れて来た覚者ということである。このようにタターガタ (Tathagata) には、それぞれの解釈があり、その一つに限定することはできないであろう。インドに早くからあつた語として、仏教よりも前から知られていた古い語であることは、仏陀が最初の説法をはじめる以前に、自らタターガタ (Tathagata) と称していたというので分かる。

従つて仏教がおこつてから、仏陀 (Buddha) の称号となつたもので、仏陀はもつとも一般的な呼び名である。これが仏であり、如来であつて、仏教では最高の位にある覚者である。しかし仏陀はバガヴァン (Bhagavat) 即ちすぐれた者という意味で、普通「世尊」とも訳し、自分自身が一切の自利を覚るのみでなく、他をして自分と同じよ

うに覺らしめるだけの能力のある円満な人格者というのである。即ち自己の理想を表現すると同時に、他の人々にも幸福をもたらすというので、これこそ仏教の理想でもある。ゲーテの詩に、

「人間よ気高くあれ、
人を助けよ 善良であれ」

という一節が、そのまま仏陀の言葉である。

この如来の数は、経典に名を連ねているだけでも、七仏、三十五仏、五十三仏、千仏、一万三千仏等という多数にのぼる。しかし小乗仏教では、仏は釈迦如来だけで、五十六億七千万年後に、弥勒菩薩が仏となつて、この世に出現するとされている。そして大乘仏教では、草木国土悉皆成仏というから、仏の数は非常に多いことになる。この仏の中で、釈迦如来は、この世に人間として出現された仏であるので「応身仏」(nimāṇa-kāya) といわれ、これに反して、大日如来、阿彌陀如来の如く人間界に生を受けないで、仏の本身としての永遠不滅な法による仏を「法身仏」(dharma-kāya) という。「法身」は、仏の本身たる法をさし、「応身」は、歴史世界に応現した仏の現身をさすが、「法身」は、永遠不滅であつても、人格性に欠けている。「応身」は、人格性にはとむが、一時的な無常なものであるから、この両者を統合した仏身が考えられた。それが「報身」(Sambhava-kāya) である。

仏の教えには種々ある。自力、他力、共力、これを最もよく表現した言葉に「こまつたときの神だのみ」、これが他力の教えであり、「精神一到何事か成らざらん」は自力の教え、「人事を尽して天命を待つ」は共力であろうか。他力は浄土宗、自力は禅宗、共力は日蓮宗

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

のそれぞれの教えと考えてよからう。また仏教論の解釈に努める理論派と、身を以て行ぎやうをおこなない、仏戒を堅持し、民衆を教化するいわゆる実践派との二派も考えられ、前者は個人的、後者は対社会的となる。そして小乗、大乘仏教もあるが、小乗仏教 (Thina-yana) は個人的なもの、それは仏教に深く帰依した人だけが、彼岸に行けるという制限的な考えで、劣れる乗りもの、即ち小乗であるというが、今日では、この語を使わず、南方仏教を呼ぶときは、上座部仏教 (Thera-vada Buddhism) とし、大乘仏教 (Maha-ayana) は、大きな乗物の意味で、自分のみが成道するのではなく、戒律を堅持し、自己を磨きながら世間を教化して、他人とともに彼岸に達するとの趣旨により、大乘と称した。日本の宗派はほとんどが、この大乘仏教に属するという。しかし以上は説明の便宜であって、仏教本来のものに、二つの性格、即ち二乗のあるはずはない。

この二乗を一つ、即ち一乗にしたのが、天台の伝教大師であって、この教えを一乗仏教という。よく一乗寺、一乗院という寺院名を見聞するが、これは天台宗の特色である。

以上如来及び宗派的なことについて、その概略を述べたが、この如来の造像の特色について知らねばならぬ。

(一) 如来像の特色

釈迦如来像が、製作されてから成立した經典には、如来の姿に関する特徴をあげて、仏の三十二相、八十種好形が述べられている。これによって、人間の姿を基本としながらも、その姿の中に、宗教的な理想を現わすように考えたものである。以下三十二相を大智度論、大正藏によって記しておく。また八十種好とは、八十随形好ともいって、

仏の人間と異なった相好の美、三十二相を、さらに細別して表現したものである。これはインド人が身体の理想的な特色を数えたもので、象徴的な名が多いという。こゝにはその記載を割愛する。

(1) 如来の三十二相

- 1、足下安平相。足が裏が平らかである。
- 2、足下二輪相。各足裏に千輻輪があらわしてある (足下千輪相)。
- 3、長指相。手、足の指が織かで長し (千指織長相)。
- 4、足跟広平相。足踵が広く、円満である。
- 5、手足指縷網相。手足の指の間に水掻きのようにまくがある。
- 6、手足柔軟相。手足が柔軟で、高貴の相をなす。
- 7、足趺高滿相。足の甲が高くもり上がって亀の甲のようである。
- 8、伊尼延膝相。伊尼延 (鹿) の膝のように織く円い (如鹿王相)。
- 9、正立手摩膝相。直立した時には手が膝をなでる位の長さである。
- 10、陰藏相。象王、馬王の如く陰相がかくされている。
- 11、身広長等相。身長と手を上げた長さと等しい。
- 12、毛上向相。体にはえている総ての毛は上になびいている。
- 13、一一孔一毛生相。毛孔上は総て一本宛の毛が生えている (一一孔一毛相)。
- 14、金色相。全身が微妙金色に輝いている。
- 15、丈光相。四辺に一丈の長さの光が輝いている。
- 16、細薄皮相。身体の皮は細薄で、一切の塵も汚れもつかない。
- 17、七处隆滿相。両手、両足、両肩、首すじ、身体の肉が円満で柔軟微妙である。
- 18、両腋下隆滿相。腋の下にも肉がついていて凹所を作らない。
- 19、上身獅子相。上半身が威容端嚴なること獅子の如くである。
- 20、大直身相。仏の身体が広大で端直無比なこと。
- 21、肩円好相。仏の両肩が円満で、ゆたかな状態である。
- 22、四十齒相。四十齒が美しく並び、鮮白で清潔である。
- 23、齒齊相。

齒の大きさ一定、すき間なく一本に見える程美しい。24、牙白相。上下四本の牙の色は鮮白で鋭利である。25、獅子頰相。両頬がふくらんでいること獅子の如し。26、味中得上味相。仏の口は常に最上味を味合、又何を喰べても最上の味である。27、大舌相。仏の舌は軟薄、広長、若し口より出せば顔全体を覆い、髪が生え際までとどき、口に入っても口中一杯にならぬ。28、梵声相。声は美しく、大声で、聞くものを感歎させる。29、真青眼相。眼睛は紺青色。30、牛眼睫相。牛王の如くまつ毛が長く美しく、乱れていない。31、頂髻相。仏の頂上の肉が隆起しており、その形が髻のようである。32、白毫相。仏の眉間に白毛あり、右旋し、伸びると一丈五尺になる。

以上が、仏の三十二相であるから、各仏はこの相を必ず備えねばならぬ。特に密教が伝来されてからは、造像についても儀軌を厳守することとなった。この専門的な学問を図象学と称し、難解とされている。

(三) 印相について

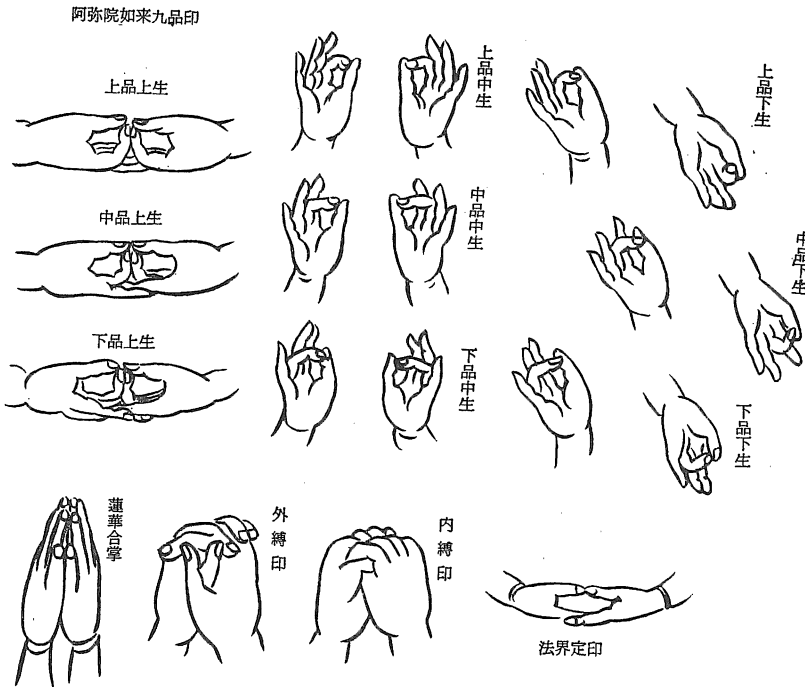
印相(いんさう) mudra は、手印、契印、印契、またただ印ともいう。その意味は印章を捺すことから、密教では標幟の意にとり、さらに諸尊の内証を示すものとされている。

手と手との組合せのほか、持物でも表現している。従って各尊の持物、特に千手観音の多くの手のそれぞれの持物は、決して勝手なものではなく儀軌により決定されたものである。

密教では、特に重んじて口伝伝承があるが、印の基本(印母)形は、六種拳と十二合掌である。また行者が観法に用いる十八契印も基本なるものを示したものである。

島根県に於ける如来(Tathagata)像の考察(大野)

六種拳は、蓮華拳(胎拳)、四指を折り拇指を外に出す。金剛拳、拇指を包んで四指を折る。外縛拳、両手の五指を外に出して組む。内縛拳(内掌拳)は指先きを内に隠して両手を組む。忿怒拳は拇指を折って中指と無名指とをその上へ折曲げ食指と小指は立てる。如来拳は



島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

蓮華拳の左手と金剛拳の右手を組合す。

十二合掌は、堅実心、虚心、未敷蓮、初割蓮華、持水、顕露、反刃、帰命、反背、覆手、履手向下、横柱指の名がある。

印相も密教以前の主なるものには、施無畏印(せむいゐん)、右手を開いて掌を外に向けて、肩の辺に挙げる。転法輪印(てんぽうりんゐん)、両手を胸の辺に上げて右手は掌を、左手は反対にして左右の本つつ指先きを触れるもので、説法印ともいう。触地印また降魔印、破魔印は、坐像で、右手を垂れて地に向けている。この印は釈迦が悟りを開かれたとき、即ち成道の時に用いられたのに起源し、成道印という。また両手の五指を伸ばして左手を下に、右手をその上に重ねた印が、禪定印(ぜんじょうゐん)または法界定印と称し、冥想に入る思惟の相である。そして施願印(せがんゐん)或いは与願印(よがんゐん)と称して、左手を開いたまま垂れ、掌を外向きにした印がある。

密教の成立後は、金剛界の大日如来の智拳印(ちけんゐん)、胎藏界の大日如来の法界定印がある。前者は両手とも金剛拳を結び、左手の食指を立てて、右手の掌中に入れたもので、右手は仏、左手は衆生で煩惱即菩提の妙理を示す。後者は既述の通りである。

特に阿弥陀仏には、九品印(くほんゐん)、即ち図示の如く、上品上生から下品下生までの九種の印相がある。浄土教で念仏行者の罪業、修行を九段階に分けて、往生に九品往生、極楽に九品浄土、九品念仏、従って阿弥陀仏に九品の弥陀が区別され、その端的な表示が九品印である。この印の中で上品上生を、妙觀察智印、定印(じょうゐん)阿弥陀印と称して一般に坐像の印である。立像では、来迎印(らいこうゐん)と称し、下品上生が普通である。また中品中生を説法印と称

するのである。

その他、種類が多いが、持物とともに割愛する。

(四) その他の特色

1、光背(こうはい)、また御光、後光とも書き、仏、菩薩の光明を象徴し、その威厳を示すために、像の背後に作られたもので、多くの意匠が工夫されている。

頭部から発する光明を現わすものを頭光(づこう)、胴身から発するものを身光(しんこう)と称し、身光ばかりの仏像はない。

頭光と身光を合せて二重光背、また拳身光と称し、立像(りゅうぞう)についてのみ用いるという。そして頭光には、円光、輪光、宝珠光、放射光等がある。拳身光には、古舟形光、新舟形光、二重円光、大円光、火焰光、壬生光背等があり、その意匠には、飛天、唐草(にんどう)、草、宝相華唐草、伽陵頻迦、化仏、梵宇、輪宝等が美しく模様化してつてある。

2、肉髻(にっけい)、仏の三十二相の一つであった。頭部が二重になり、その高い部分をいう。藤原時代の末期から、水晶で作った丸いものを高い部分につけたが、これも肉髻という(安来市清水寺の阿弥陀仏)、この肉髻は高貴の相である。

3、螺髪(らほつ)、如来像の頭髪のこと、髪毛が巻毛状をしており、右巻の田螺の殻のように刻んで、一つ一つが表面に植えつけられたもの、じかに刻出したものがある。また全然螺髪のないものもあり、これを素髪という。あるいは清凉寺釈迦如来像にみる、繩のように髪をよって、頭に巻きつけたガンダーラ風のものもある。

4、白毫(びやくごう)、白毫相、または毫相と称し、如来の三十

二相の一つであった。眉間みげんにある、白色の右廻りの旋毛で、光明を放つという。如来像に限らず、菩薩像にも水晶などを眉間にはめ込んだものがある。筆描きの白毫もある。

5、納衣(のうえ)、納衣ともかき、法衣ほふえのことである。特に如来の納衣は粗末なもので、納袈裟、弊納衣、壞衣などと称し、五色あるいは多くの色をまぜ合せて作ったものを、五納衣、百納衣などともいう。

この納衣を両肩にかけて着たのが通肩、右肩を出して着たのを偏袒右肩(へんたんうけん)と称し、これは古代インドの専ら尊者に対するときの礼法であるという。

6、台座(だいざ)、仏を安んずる台のことで、その種類は多いが、主なるものを記すと、蓮華座は、普通仏、菩薩に多く用いられ、三重、五重、七重の別がある。又大仏座、踏割蓮華座(浜田市、心覚院)、仏像も、この一種である。須弥座(しゆみざ)、全体の形が宣の字形のためか、宣字座といい、この座に衣が垂れているのを裳懸座(もかけざ)（仏谷、万福寺等の仏像）ともいう。他に吉祥座、荷座、洲浜座、琵琶座、方座、礼盤座、牀座、曲ろく座、禽獸座、亀跡座、鼯もみぢく座、獸皮座、上げ畳座、雲座等がある。

以上如来像の形相の概要を述べたので、これを基として、島根県の如来像について考察をすすめたい。

三、島根県に於ける如来像

日本美術史に於て仏像彫刻の時代は、飛鳥、奈良(白鳳、天平)、平安(貞観、藤原)、鎌倉時代であった。島根県に於ける如来像は、この

島根県に於ける如来(Tathagata)像の考察(天野)

隆盛期の中で、前記に掲げたように、白鳳時代、貞観時代、藤原時代、鎌倉時代に該当する仏像がある。先ず、美術史の立場から、島根県の如来像の該当する時代の様式を考察して、後その時代の如来像について述べることにする。

(一) 美術史から見た白鳳時代(AD701~806)

仏像は飛鳥時代に朝鮮から伝えられ、上利仏師によって飛鳥様式の仏像の完成を見たが、白鳳時代は、隋唐文化が直接に我が国に移入された。特に大化の改新(六四五)を要因として、飛鳥様式から脱脚して、新しく白鳳様式が形成された。

この白鳳様式は、我が民族が、大化新政により、ある程度の富が分配され、即ち班田制によって、「大らかなもの」が生じたというのに原因がある。そして仏教も約一世紀を経て、人々と親和的となった。そして自然に対しても親和的となった。その一例は、「春山万花艶、秋山千葉彩」を競そわせられた天智天皇。「わたつみのとよはた雲の……」と夕雲の美しさを認めた歌によって、自然との親和の精神の現われが知られる。しかもこの親和性には、感覚的に美を求めた、情趣性の高調があると思われる。しかし白鳳人の感性は、極めて素朴であった。この素朴さが、幼児の無邪気な美しさを求めたといえる。従って、造像にあたっては、この幼児に見られる姿態をもつてし、そこにあどけなき、無邪気さが感知される。このあどけなき、無邪気さは、具体的にみると、仏像の童顔、首に三道、身体の割合からして頭部の比較的大きいこと。おへその大きいこと、そして姿態がS字状となり、遊足体と称し、一本の足に重さがかかり、他の足は軽く遊んでいく様相がある。そして技術の上からは、まだ未熟な技術のために、仏

像も浮彫的であることに気がつく、浮彫的とは、仏像の背部が比較的平面的であることである。当時シナの隋に於ても、北魏(飛鳥的)の意志的な造形に対して、主情的な造形へと移行した時代であった。

それ故に白鳳仏には幼児性からくる素朴と優美、そして明朗性が見られ、これが白鳳時代の美的様式となる。

(二) 白鳳時代の如来像

1 金銅、如来形立像

県指定文化財 昭四二、五、三〇、鵜淵寺

如来形仏像を述べるに先立って、釈迦如来について、その概略を記しておきたい。

釈迦牟尼 (sakyamuni) の釈迦は、インドの迦毘羅国に居住する種族の名称である。牟尼は梵語で、訳して寂黙、また智者ともいうから、釈迦牟尼は、釈迦種族の中から出世した智者ということになる。一方、古来和漢の学者は、釈迦を能仁、牟尼を寂黙と説いて、慈悲と智慧の二徳を備えたるものとした。

釈迦牟尼の出身来歴については、種々の異説があるが、一般に認められている説によると、西暦紀元前五五八年―日本では第二代緩靖天皇二十五年―に、父王を首領檀那(浄飯大王)、母は王妃摩訶摩耶として、春うららかな四月八日に離宮の藍毘尼園の無憂華の樹下に誕生。幼名を悉達多(願望のかなったものという意)と名づけられた。しかし母摩耶夫人は太子誕生後七日目に死亡し、摩耶夫人の妹が養母となり、父王と細かい心づかによって養育されたが、太子は早くから瞑想への傾向が現われたという。これは幼児期の悲劇の反映と見られてい

太子の人間の苦悩は如何することもできなかった。伝えによれば(1)町はずれで老人を見た。(2)外出の時病人、(3)死人を見た。そして(4)出家の姿を見て、その神々しく満足しきった姿に接した時に、太子は自分の理想像をこの僧に見出したと、ついに出家をする決心を固めた。そして老、病、死に対する強烈な反省が二十九才の年に始まった。

又他の説では、太子の国には四階級の制度があり、この制度は絶対に犯すことができなかった。その四階とは、婆羅門が最上位で、浄業に従事する僧侶の階級。次ぎは刹帝利で、王族及び武士の階級。第三は毘舍で、商売人の階級。第四は首陀、即ち屠者、奴隸の階級であった、最も卑められ、他の階級の者とは交際も出来なかった。太子はこの不合理を知り、四民平等の自由世界を創造して、下人に幸福を与えんと念願されたという。

いづれにせよ、太子は無常感によって、出家を願われた。妃耶輸多羅は、男子を生んだので、太子には恩愛のきずなくなったが、他面家系の継承者を得たので、出家すべき時機が到来したと、或る夜半、白馬建陀伽に乗り、馭者を従えて城を脱け出た。途中馭者とも別れ、一人となって東南に向った、そして沙門、(Sramana)の仲間に入り、ゴータマと呼ばれ、六年間の難行苦行を続けたが、この苦行が解脱の道ではないと悟って、苦行を中止した。恰度、その時ウルヴィルヴァー村の娘が乳粥を用意してきたので、それを受け、尼連禪河に身を清めて、それを飲んだ。そして河畔のアシュヴァッタ(菩提樹)という木の下に四十日間の禪定の座をしめ、紀元前五二三年のヴァイシヤーカーの月(四月―五月)の満月の夜(日本では十二月八日)三十五才にて大悟して、仏陀となられたのである。この姿が成道像である。これ

よりさき、鹿野園を訪れ、自らの悟道の心境を伝えた。これが釈迦の初転法輪である。その祇園、竹林、大林の各精舎を根拠とし、インドの各所を遊化して四諦八正道の解脱の道を宣布されたが、齢八十才の春、インド拘尸那伽羅城外、跋提河畔を遊化中病に倒れ、二月十五日夜半沙羅双樹下で涅槃したまうというのが普通の伝記である。

釈尊の一生の主な行績八つをえらび、これを彫刻、図絵にしたものが、釈迦八相で、降兜率、入胎、誕生、出家、降魔、成道、初転法輪、涅槃の八場面である。さて

鰐淵寺は、山号を浮浪山と称し、島根半島の西寄り、平田市別所町にある。天台宗の古刹である。



1. 如来形立像
鰐淵寺

寺伝によると、開創は推古天皇二年（五九四）に、知春上人が、山内の浮浪滝に推古天皇の病眼平癒を祈願して建立した。その時、上人は滝壺（一説には日本海）に、仏器の椀を落したところ、ワニザメがそれを銜えて浮び上がったことから鰐淵寺の寺号を得たという。その当時は浮浪滝を中心に、修験信仰が盛んであったらしい。浮浪滝は、数十米のそそりたつ岩壁の間に岩窟があり、そこに蔵王堂と称する小堂がある。

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

この小堂の上の岩壁上から堂前に直下する滝である。この小堂に観音菩薩立像(重要文化跡)が安置してあった。本如来形の立像も、この地から発見されたものであるから、蔵王堂の信仰は盛んであったと考えられる。

寺史によれば、正中三年（一三二六）の古今記録案に、寛和二年（九八六）に千年堂、葉師堂の破損を、国衙から造営をうけ、天永三年（一一一二）に、国費により寺院、塔を建立し、三井寺長吏同乗房及び諸僧百人を迎えて、盛大なる落慶供養を行ったという。中世には、佐々木高綱の甥泰清が、出雲の守護職となり、当寺のため塔を建立し、又守護不人の特権を与えたと古文書にある。そして南北朝には、鰐淵寺は南北両院に分れた。当時の文書は多数残存しているが、その中でも重要文化財として「後醍醐天皇願文」「頼原文書」「名和長年執達状」は有名である。貞治五年三月二十一日に頼源は、天皇、親王から拝受した宸翰、綸旨、令旨を後任の浄達上人に譲っている。この文書の来歴を書いたものが「送進鰐淵寺文書等目錄事」である。以上は沿革の概略であるが、鰐淵寺信仰の根本は、蔵王堂であったというべきで、本像も当時の信仰を受けた像と考えられる。

金銅造如来形立像として指定された本像は、異形施無畏与願釈迦像と称したい。それは施無畏与願の釈迦の如くであって、左手の小指無名指を曲げている像であるからであって、この像は飛鳥時代のものにのみあり、以後のものにはあまり見ない。

本像は、総高二〇・六六センチ、頭部の長さは四・七センチ、頭髪は宝髻、顔面はややうつむき気味で、柔和な相貌である。衲衣には大らかな平行線の衣文があり、一見極めて素朴である。右手、左手は前

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

述の如くである、尚本像の鑄造は鐵型であるから、奈良時代後期の像といわれているが、諸条件を綜合して奈良時代前期即ち白鳳時代とみるべきである。下部の柄は台座に接合したものであるが、台座は現存していない。像全体に緑青が生じいる。

本像は、山王七仏窟にあったものを、昭和三〇年八月に地方史研究所主催の出雲総合調査団が発見された。

(三) 美術史から見た貞観時代 (A.D. 8 C ~ 10 C)

貞観時代は、平安時代の前期である。そして本時代を弘仁時代ともいうが、それは平安遷都(七九四年)から、宇多天皇の御讓位(八九七年)の期間をとる立場であり、ここでは七八〇年から九八〇年までの、二百年の期間をとって貞観時代と称する。

本時代は、天平時代の律令制度と唐風文化を継承した時代であるが、実質的には天平時代とは大きい断層がある。それは、「におうが如く今さかなり」と歌い、仏像を「ますらお」と見た、栄える天平時代とは反対に、国民の生態度の極消化した時代といえる。

大体、西暦八百年代は、東洋は唐、新羅、渤海の滅亡が示す如く、没落の時代であった。従って若さの失われた、いわゆる老成時代ともいうべき時代となった。さらに加えて、「無為自然」の老莊思想が、シナから輸入され、また仏教は、不遜の僧侶が多く、僧姿にかくれる無頼の徒となり、或いは政權に参与するという、本来の僧侶の姿は見られなくなり、この腐敗に対する刷新は内部から抬頭して、平安京への遷都の原因もここにあった。この時に、最澄、空海が共に天台、真言の二宗を興したことは著名である。ところがこの宗派は、加持祈禱により即身成仏をするというので、苛烈な修業を課すると共

に、秘法を厳守することが強く要求され、秘密の教となった。これを密教と称し、この密教寺院は、寺地を山間の靈地に求め、行ずる堂内は、仏像は外部と遮断した暗い内陣に安置し、その仏像も大日如来を主尊として、特に密教によりできた忿怒相の明王都の像をまつた。しかも厳格は教理は仏像の造像その他に対して、経儀による厳しい規定を厳守した。従って仏像も神祕な力に頼ることになり、細密な表現であった、従来の仏像に代って、外部的な力即ち量 (Volume) の形成を重んじたので、体軀は肥満し、その面相には神祕的な渋晦さと森厳さが現われた。

そして本時代の彫刻には、材料が殆んど木材に限られた。それは天平時代の東大寺大仏の造像にて、国銅を使い尽したことから、密教では材料には清浄なるもの、靈性のあるものが特に期待されたからである。御衣木加持と称して、素材を浄め靈性を与えるという修法さへ行つたのである。特に密教は造像を重要視したので、木彫は隆盛し、木彫成が多く、そして飄波式刀法も創始された。この刀法は日本特有の発達事情が考えられる。そして密教は、神仏習合説によつたので、神像彫刻が発達したことは見逃すことができない。以上の見解によつて、貞観時代の様式の根源には、政治や宗教が大きい原動力となり、美術にも独自の様式が形成された。その美的様式としてあげられるのが、重厚、森嚴、そして陰鬱である。

以上をもととして、特に島根県に多い、貞観時代の如来像を考察することとする。

(四) 貞観時代の如来像

2 木造、薬師如来坐像

重要文化財 大九・四・一五指定 仏谷寺

薬師如来は、薬師瑠璃光如来と訳し、東方瑠璃光世界の教主で、瑠璃光王とか大医王仏とも呼ばれている。本如来の成立の時代や場所は、不明確で方便的なものから成立したものらしい。薬師如来の経典が漢訳された時期は、隋大業十二年（六一六）であるから仏教思想、教理の方から見ると、教理的大系の中では重要な位置を占めてはいない。従って密教の中心経典である大日経、金剛頂経の中にも説かれていないので、両界曼荼羅にも描かれていない。たゞ東方阿閼如来と同一とされている。

しかし、中国や日本では、その信仰は盛大で、像が制作され、薬師浄土図までも描かれている。我が国の薬師如来像の造像は、推古天皇十五年（六〇八）に、止利仏師によって造られ、現在法隆寺金堂内に安置されている。

薬師如来像の形姿は、他の如来像と格別の変化はない。即ち頭髪は螺髪、身体には何の裝飾もつけず、結跏趺坐する釈迦如来像と同形である。印相は施無畏、与願の印で、この印相を通仏相という。この印相だけでは、古代の釈迦と薬師如来を区別することは至難である。しかし貞観時代より、薬師如来の信仰は多彩となり、特に仏教大師（最澄）は、延暦寺の根本中堂に、薬師如来像を本尊として安置し信仰したので、天台系の寺院に於いては盛況であった。この時代から新しく渡来した「不空訳薬師如来念論儀軌」によって、信仰され薬師如来像に薬壺（薬器）を左手にとるようになったので、一見して薬師如来と知られるようになった。島根県の薬師如来像は、全部が薬壺をもっている。

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

るので、貞観時代以降の造像であることが分かる。

この薬師如来は、現世的な信仰で、死後の世界、未来の成仏を本誓とする仏とは格段の相違があり、現実的な効果、即ち病氣平癒という功德がある。従って高邁な理想的な理論はないのである。

薬師如来の現世利益的誓願は、他の如来には見られず、観音菩薩の現世利益的信仰と前後して、広く長く伝えられてきたのである。この功德は、修行中に誓われた、二十二の大願中に、除病安樂、息災離苦、莊具豊満などがあるところからであって、責任も重大であるということになる。ところが人間の病氣は、千種万様であるから、薬師如来は大勢の助手が必要となる。即ち、如来の左脇士に日光菩薩 (Śrī Vyaparaha) 右脇士に月光菩薩 (Candraparaha) が、それぞれ脇士となり、手に日輪、月輪を各々持つか、蓮華茎上に日、月輪がついたものを持つかである。そして如来の周囲には十二神将が位置しているが、寺院によっては内陣の一隅に集めてあるものもある。その十二神将は次ぎの如くである。

	(神名)	(色の配分)	(持物)	(方位)
1	宮毘羅	黄	宝杵	子
2	伐折羅	白	宝劍	丑
3	迷企羅	黄	宝棒	寅
4	安底羅	緑	宝鎚	卯
5	額闍羅	紅	宝叉	辰
6	珊底羅	紅	宝劍	巳
7	囚達羅	紅	宝棍	午
8	波夷羅	紅	宝鎚	未

9	摩虎羅 <small>まこら</small>	白	宝斧	甲
10	真達羅 <small>しんた</small>	黄	宝索	酉
11	招社羅 <small>しやとら</small>	青	宝鎚	戌
12	毘羯羅 <small>ひかから</small>	紅	輪宝	亥

この十二神将には眼をつり上げ、口をかみしめ、牙をむき出し、腕を振り上げ、足を挙げる姿態のものと、静かな平穩な姿態の像とがあるが、前者は新しい時代の像に多い。また貞観時代になって、冠に十支の動物の面をつけるようになった。

何分にも現世利益の如来であるので、島根県の如来像中でも最も数が多いのである。

仏谷寺は、三明院仏谷寺と称し、古くからあった三明院が、新興の仏谷寺に併合されたのである。寺伝によると、聖徳太子の開創、その後行基上人が三明院の本尊を彫刻し、また弘法大師が七堂伽藍を建立し、真言宗に属したという伝承がある。

承久三年(一二二二)後鳥羽上皇の行在所、元弘二年(一二三二)三月には後醍醐天皇の行在所となった。古くから真言宗として栄えて



2. 薬師如来像
仏谷寺

いたが、次第に衰微して、寛文年間には仏谷寺に三明院は寺守りされていたことが、「社帳」によって知られる。永正十三年(一五一六)知恩院の順度上人によって浄土宗に改宗された。

薬師如来坐像は、像高一〇センチ、台座高、六八センチ、イチイ材の一木彫成である。イチイ材は神官の笏に用いられる神聖な材であり、出雲国が神国と云われる関係に於て興味がある。尚現在は浄土宗であるから、阿弥陀如来が本尊であるべきも、薬師如来像が本尊であることは、かつて真言宗であったことを物語る。

本像の面長な顔と開いた眼、そして肥満な筋肉からは、或種のきびしきを感じる。そして肉髻の盛り上り、肩の張り、体軀の量的な外部力の充実さは、堂々たる姿態であり、かつ衣文の彫りは非常に浅いが、旋転文が見られて、貞観時代の様式による像といわれる。

そして右手は施無畏の印、左手には薬壺、そして両臂は肥満しているが、膝が低くその衣文も形式化しているのは藤原様式とも考えられるので、貞観時代の末期とみる。この像は、地方の作として、出雲地方の彫刻の中では、異例なものである。その他、本寺には本像と同一様式の菩薩像四軀の重要文化財が安置してある。

3 木造、薬師如来坐像

重要文化財 明三五・七・三二指定 万福寺

万福寺は、寺伝によると、鱒淵寺(19頁)の開山僧智春上人により、推古天皇の御代に開創されたと伝える。永祿年間に、浄土宗に改宗されたが、それ以前は大寺薬師と称し、天台宗として盛大であった。



3. 葉師如来像
万福寺

一畑電鉄には「おおでら」という停留所がある。付近一帯を眺めると、往古の盛事の偲ばれる地形で、何かなつかしさを覚える。本寺の背山には、出雲地方では豪壮なる後期古墳の、前方後円墳がある。これは、本寺の歴史の古さを語る資料である。現在の寺域は、徳川時代に於て、北方約三百メートルの奥地から移されている。その当時、大洪水により山崩れに合つて寺院、仏像が土砂に埋まったことが記録にある。そのことを証明するが如く、仏像は寺院特有の煤よごれがない。また、現存の仏像が一八〇センチの大きい像であることからして、旧本堂が十二間に七間の大建築であつたということも不当ではない。

葉師如来坐像は像高一・三・五センチ、ヒノキ材の一木彫成であるが、補修が相当ある。全体として量的形成であるが、特に衲衣の重厚さが見られ、衣文の刻出は、比較的浅く、鵜波式刀法が用いられているが、それは形式化されている。この衲衣が肉体を超克しているの

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

で、仏谷寺像より、明るく感じられる。本像も貞観仏時代の地方作の像と見られるが、仏谷寺像と比較すると、様式も降つて藤原初期とも考えられる。其他、印相などは仏谷寺像と同じである。本寺には、他に重要文化財指定の菩薩像四軀、そして四天王像があり、地方寺院としては稀有の存在である。

(五) 美術史から見た藤原時代 (A110C~12C)

貞観時代の密教思想は、藤原時代となつても仏教の主流であつて、宮廷、貴族と密接な関係を保持していた。しかし末法思想の普及により、逐次、他力信仰に傾いていった。それは比叡山に於て阿弥陀如来を本尊とする念仏三昧の教えが、慈覚大師により常行三昧堂場として興つた。それに恵心僧都源信(九四二—一〇一七)が「一乗要決」により、一切衆生悉皆成仏の義を明らかにし、かつ中年になつて名著「往生要集」を著すにいたり、阿弥陀念仏に関する經典の要文を集め、一心称念の念仏を熱烈に勧め、叡山教学の中から、淨土念仏門の独立の基礎を開いた。この教えは、ただ念仏を称名することによつて、西方淨土に往生することが可能であるとし、面倒な理論、難行によらないことを本旨とした。そして現世にも淨土をとの念願は、仏像、仏画に特殊の表現様式を生むにいたつたが、それ等は繊細にして甘美なものであつた。

他方遣唐使の廃止は、我が国民を強い刺戟から遠ざけ、国内における、いわば平和時代を現出し、この状勢の中で藤原氏一門の権威は保持され、道長にいたつては皇室の外戚、外祖父となり、その位は摂政関白の高きに昇り、彼をしてついに「この世をばわが代」と称し「望月

のかげたることもなし」と詠ずるに至らしめた。従って、その生活は豪奢を極め、耽美的生活となり、貴族の仕事は、詩歌、管弦、美術に見出すことより他に道はなかった。しかも世襲制度の制は、貴族と相對する階級はなく、いわば貴族階級は絶対階級となった。そして、その生活が驕奢といわれ、文弱に墮したと評されるに至ったが、その反面には、貴族達の情操は淳化され、感覚は洗練されて、今までの時代に見ざる、風雅な生活が営まれた。しかしこの生活は、極めて女性的なものであったといわざるを得ない。

以上の考察により、藤原時代の様式は、女性的なもので形成されたといわれる。この女性的なるものの内容を検討すると、次ぎのことが考察される。

生活態度は悠々たるもので、行動に鈍にして、感情に敏なる生活、即ち意志の生活でなくて、情念の生活であり、理性の生活でなく、趣味の生活であって、感情的であるといわれる。故に当代の美術は気分表現が多い。この感情的は、個人的、即ち私的であることであり、それはまた室内的であることで、遊戯について見ても、室内遊戯であり、かの大和絵、かな文字の創始も、こうした中から形成されたものである。そしてその形成されたものは、特に小さきものの美を作り出し、且つ愛した。このことは枕草紙に詠まれる「何も何も小さき物は、いとうつくし…」によって、知ることができであろう。この小さきもの美には、理知的な感情の緊張はなく、安易なものが見られる。

仏像彫刻に於ても、細部の驚くべき手細工的な技巧、そして寄木造りの方法により、重厚な像から、親しみ易い感じを与える像にかわつ

ていることである。

これらの様相から、美的様式としては、優美、典雅をあげる。優美は、枕草紙に見た、倭小性と、「昭りもせず……春の夜のおぼろ月夜にしくものはなし」と歌われた、朗らかではあるが、輪廓のぼかされた、所謂明鮮性が内包されている。典雅は、貴族的な美、即ち現実を越えて理想化された美であって、それには静閉性と貴族性が内包されている。これらの美的様式は、要約すれば優雅ということになる。従来の外来からの美ではなくて、完全に国風化された様式であって、日本独自の創造された美である。この優雅を念頭にして、如来像を考察する。

(六) 藤原時代の如来像

4 木造、阿弥陀如来坐像

重要文化財指定 明治三五・七・三一 清水寺

藤原仏といえば、まず阿弥陀如来を憶う。それは西方十万億土の彼方に浄土をたてて、この地を極楽浄土と称し、この浄土の教主であり、藤原時代に最も隆盛をみたからである。

阿弥陀如来は、梵語では阿弥陀由須又は阿弥陀婆とも記し、前者は無量寿、後者が無量光明と訳す。即ち寿命無量、光明無量を合せて阿弥陀仏というのが通則らしい。その他に弥陀の光明を具象化して、十二光仏を立てることもある。即ち無量光、無礙光、焰王光、清浄光、智慧光、歡喜光など、いづれもこの阿弥陀仏の徳分を現わしたものである。

この阿弥陀如来の信仰の盛んなことは、他の如来より一頭地を抜い

ている。本如来の形相、極樂浄土の様子は觀無量壽經（觀經）に説かれていた。他に無量壽經、阿彌陀經があり、この三經を「浄土の三部經」という。この阿彌陀仏は、他仏と相違して他力往生の誓願を立てられた。即ち阿彌陀仏を信ずる者は、一向專念に仏名（南無阿彌陀仏）を唱え、仏は大悲の光明を照らし、撰手を延ばして、念仏行者を必ず極樂浄土に迎えられて、来世の果報を得させられるというのである。

この阿彌陀仏は、無量壽經によると、或国の太子として誕生したが、世自在王仏の感化で仏道に入り、名を法蔵比丘と改め、五劫の長い間思惟されて後に、四十八の大願を成就された―釈迦と似通っている―そして遂に理想の世界、極樂浄土を西方の国土に建設され、今も其処で説法化行に尽くされるという。また、觀無量壽經によると、釈迦と同時代に、阿闍世というマガダ国の一太子あり。悪友により、父頻婆娑羅王を幽閉して死に至らしめんとした。頻婆娑羅の夫人、阿闍世の母、韋提希は、身を清潔にして酥密に小麦粉をまぜたものを身にぬりつけ、玉の嬰瑤の穴にぶどうの汁をもつて、幽閉中の大王に近づいて大王の命を救う。阿闍世は門番に問う、頻婆娑羅は死んだかと。門番は答える。死なないと。阿闍世は、その理由を知り、怒って、母を殺さんとする、大臣月光と医者耆耨は、命を賭して阿闍世を母殺しの罪から救う。やっと阿闍世は母を殺すことをあきらめ、彼女を源宮に幽閉する。このような悲劇を背景にして、偉大なる浄土の教えは説かれるのである。韋提希夫人は悲しむ、そして涙の雨の中で、彼女は釈迦に哀願する。「もうこれ以上、このにごった世界に住みたくありません。どこか、未来のうれいのない国へ行かして下さい。」五体を地

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

に投げ、身も世もあらず泣き、ずれて懺悔する韋提希夫人に、釈迦は十方の光り輝やく国土を示す。しかし韋提希の願いはただ一つ「極樂世界、阿彌陀仏の所に行かして下さい。」韋提希は、このようにして仏の力で、阿彌陀浄土、極樂世界の美しさを見、それを信ずることが出来たが、後世の衆生は、このような仏の力にすることができない。それで、この極樂浄土に行く方法を、釈迦に、教えてくれと頼むのである。これが所謂、定善と散善である。

定善とは、心をもつところとして阿彌陀如来と、その世界を觀想して浄土に往生する方法であり、散善とは、心の散り乱れているままに悪を廃め善を修めて、阿彌陀浄土に往生する方法である。定善には十三の觀法があり、詳細は述べることができないが、難行であつて普通人には困難とされる。この点散善は大きく三種、即ち大乘の仏教を信ずる善、小乗の仏教を修める善、世間的な善がこれである。この三種の善に、それぞれ三段階があり善の階層に応じ九品（九つの位）に分けられ、この段階によって、出迎える阿彌陀仏、浄土へ行く早さが違って来るといふ、この九品が印相（15頁）となっている。

こゝで阿彌陀仏によって、現世に対する絶望は来世に対する希望となり。また死の不安を前にして、この不死への希望が満足され、死の不安が解消される。この二つは消極的な面であるが、他に人間の心に大きなものを与える。その一つは美の崇拜であつた、觀無量壽經が多く読まれる時代は、想像力の無限の行使を可能化した時代であつた、これが前に記した藤原時代の美と関連する、そして阿彌陀仏は攝取不捨の慈悲である、即ち一人ももらすことなく愛を受け、救が得られるというのである。



4. 阿弥陀如来
清水寺

以上阿弥陀如来の思想を見てきたが、この思想が造像の上にも現われていることである。即ち九品の印相とともに阿弥陀仏の坐像と立像についてである。坐っている仏の所へは、これから定善、散善によって出かけてゆかねばならぬから、ゆとりがある。しかし念仏を称えれば、すぐ出かねばならぬ阿弥陀仏は、立っている方がふさわしく、脇士さえないのが多い。この像が多く鎌倉時代に造像されていることは故あることである。阿弥陀如来の脇士は、左が観音、右が勢至であるが、観音は往生人を乗せるといふ蓮台をさぐげている。尚この脇士が跪坐しているのも来迎をいそぐというためである。

清水寺は、安来市南方に位し、天台宗瑞光山と称する古名刹である。本像は境内の常念仏堂に三尊形式となって安置され、その主尊である。像高八五・五センチ、頭部の螺髪は小さく、肉髻珠は白毫とともに怪しいまでに光っている。衣文に見られる刀法は、鋭く、あざやかで美事である。この衣文が肩、膝上で消えているのも藤原仏の特徴である。なお両肩のなだらかさ、膝の低いのも女性的な特色であ

る。印相は、上品下生即ち、来迎印である。結跏趺坐し端正で、瞑想的な優雅さは、藤原時代を偲ばせ、且つ極楽浄土の主尊たる風格は格別で、この美しさは山陰地方随一である。

5 木造、薬師如来坐像

重要文化財 昭和三五・七・三一 華蔵寺

華蔵寺は松江市の東方本庄町の枕木山頂にあり、中海を眼下に眺望は格別である。境内は広いが、無住のため荒廃しているのは惜しい。もと天台宗であったが現在は臨済宗である。

寺伝によると、延暦二十二年(八〇三)に、天台宗の智元上人が勅命により開山したという。

薬師如来坐像は、薬師堂の本尊にて、日、月光菩薩の立像が脇士であり、この脇士も優作である。本像は像高八八センチ、台座七三センチ、もとは彩色像であったことが像の凹部の群青色、唇の紅色で分かる。螺髪は極めて小さく髪際で三十六個が数えられる。右手は施無畏の印、左手に薬壺をもつ普通の姿である。



5. 薬師如来
華蔵寺

面相は慈悲の相好、眼は彫眼で胡粉で彩色され、目玉にはくまどりがあり美しい眼である。白毫は失われている。衲衣は偏祖右肩で、右肩からの衣文はみごとく、鬚波式刀法が見られる。

光背は二重光背で、その周囲に飛天が配され、頭光には五仏、身光には宝相華が精巧に彫刻されている。そして台座は八角形で六辺葺蓮華台つきで優作である。

本像は貞観時代の渋晦さを超えて、柔和優雅であり、精巧な技術は藤原様式の靈仏と見られる。

6 木造、阿弥陀如来坐像

県指定文化財 昭和三五・九・三〇 禅定寺

禅定寺は、飯石郡三刀屋町鍋山にあり、天台宗慶向山と号す。

本像は、像高一八三センチ、ヒノキ材の一木彫成であるが、膝部は接合されている。頭部の肉髻は比較的高く、螺髪は粒も大きい。膝部は角立体的であり、衣文は浅いが大胆な刀法をもって刻出され、胸の辺に特色のある旋転文が作られているところ、また腹部に二本の横線を



6. 阿弥陀如来
禅定寺

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

刻んだところは地方作としての顕著な現われである。一見して量的形成に富み、貞観仏のようであるが、すでに顔面の魁偉さは失われ、円満な藤原仏の面相に代っている。しかし胸の旋転文は貞観仏の名残りであろう。印相は、上品上生の印で弥陀定印である。藤原時代初期の像とするのが妥当であろう。

7 木造、阿弥陀如来坐像

県指定文化財 昭和四一・五・三一 極楽寺

極楽寺は、出雲市西方の芦渡町の無住の小庵に安置されている。

像高一四四センチ、マツ材で彫成されている。背割の内側に

芦渡之極楽寺本尊也

右悲為仏恩報謝衆生濟渡也

伝聞行基菩薩之造不知年号時代而破損極故

南無阿弥陀仏

明曆三丁酉再興乏者也



7. 阿弥陀如来
極楽寺

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

神門寺一代住持今阿弥陀寺隱居貧道七十歳

無二志抽如此蓮蓮社定誉上人敬白 (花押)

の墨書があるが、現在では背剝を膠着したため読みとることは不可能である。

本像は漆箔は剥落し、腕、膝、背部の矧ぎも離れ、その上に虫食も甚だしく、僅かに顔部と胸部がやや完全であって、崩壊の危険があったのを大修理されたものである。

修理された本像は、肩の線がやや右上に傾き、首が比較的長いので、安定した胴部と不調和である。頭部の材から刻出された螺髪には、螺状の彫刻は施してないが、整然と配列されている。肉髻珠はなく、白毫が大きい、眼は彫眼である。衲衣は偏袒右肩で結跏趺坐し、上品上生の阿弥陀如来の定印を結ぶ。膝部の高さは二一・五センチであるから比較的低い。衣文は流麗で温和、そしてよく整っていて膝の上部では衣文は刻出されていない。背部の衣文は僅かに残っている。胴体は一本彫成、膝、腕頭部が接着され、金箔の残りが、その当時の像を偲ばせる。本像は、貞観仏に見られた、魁偉さはなく、温和で、顔面の輪郭は童顔に近いが、口および顎の部分には比較的きびしい隆起がある。膝部は角立体的で地方作を語るものであるが、仏谷寺、禅定寺の像に見られた腹部の二本の刻線は、一本になっていて時代の新らしさを示す。

8 木造、薬師如来坐像

県指定文化財 昭四一・五・三一 富貴寺

富貴寺は、大原郡加茂町に在る無住の小庵であり、薬師如来坐像



8. 薬師如来坐像
富貴寺

は、この庵の主尊である。像高一四七センチ、ケヤ木の一本彫成である。右手は施無畏印、左手に薬壺を持つ。頭部の螺髪は頭部の材より刻出され、髪際にて二八箇の螺髪が数えられるが、肉髻珠はない。白毫は失われて、直径一センチ位の中に珠数らしき玉が挿入してある。衣文は流麗で藤原仏の特色を現わしている。膝部は胴体に接合しており、その形状は角立体的形を脱して、自然である。薬壺の下部には金箔が残っているのを見ると、像には金箔を施さず、檀像形式をとり、薬壺だけに金箔を施したものであろう。唇部には僅かに朱色、口ひげの墨書が残っている。腕は後補である。背部には、浅い内割があるが、その蓋が失われている。像は厚手に彫成されている。藤原仏の坐像としては大作であるとともに優作である。

9 木造、薬師如来坐像

県指定文化財 昭四三・五・三一 正法寺

正法寺は那賀郡三隅町大字三隅にあるが、すでに、同寺の雨宝童子



9. 葉師如来坐像
正法寺

立像は、県指定となっている。

本像は、正法寺の本尊でヒノキ材の寄木造り、頭部、前面部、背面部、右腕部、膝部の五部から成っている。像高一〇九センチで、もとは彩色が施してあったらしく、今では唇に紅色を残すのみとなっている。右臂は屈臂して掌を前にした施無畏の印、左手は葉壺をとり、左肩はやや下がっている。螺髪は極めて小さく刻出されている。白毫はない。面相は慈悲円満な相で、眼は彫眼であって、俯瞰した様相である。

衣文を見るに左肩から流れ出た衣文は、腕から膝にかけて流麗であり、鰐波式刀法が見られる。背部に墨書があり、全部を読みとることはできないが、左肩の下に「仏師□□式部郷作」とある。右肩下にも一行の墨書があるが判読が不可能である。頭部は全体から見て小さいが、重量感にとみ、如来像としての風格が見られる。製作様式その他からして、藤原末期の造像と見られるが、後補の箇所が見られるの

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

は惜しい。しかし出雲部に偏した仏像の中で、石見部の極めて稀な像の一軀として貴重である。

10 木造、大日如来坐像

県指定文化財 昭四三・五・三一 極楽寺

大日如来の梵名を摩訶毘盧遮那仏という。この梵名は大盧遮那仏の意味で、奈良東大寺大仏、唐招提寺金堂の本尊を想起する。特に東大寺の大仏の蓮華（天平時代）には、梵網經の説く千葉の蓮華の一葉ごとに一つの世界があり、その各世界に釈迦が出現して説法を行ない、夫々の釈迦は、また夫々の国に於て法を説くというので、その説かれる仏の世界は百億の世界になるといふ。このことが毛彫りで現わされているので、こうした大きい構想のもとで、大仏は巨大に造像されたのである。このことは盧遮那仏が仏教の根元の仏として一つのものである。一つに統一せんとする思想によるものである。従って大日如来の名称からしても同系統の仏であることが分かる。

この大日如来は、大日經、金剛頂經に、その中心本尊として出ているので、盧遮那仏の思想が成立してから、インドの仏教思想間に広まり、新しい仏教的統一の世界を作り出さんと諸所で試みられたのである。

この二つの經典に説かれる如来の形相は、肉髻が高く、宝冠、首飾りをつけた菩薩形の特異なものであるが、印相は異なる。即ち大日經では、膝の上に両掌を重ねた禅定印で、これを法界定印と称し、金剛頂經では、両手を胸の前に挙げ、左手の人差指を右の拳で握る智拳印である。この印相は、大日經が理の世界、金剛頂經が智の世界を説くといわれるのに適切である。そして曼荼羅ができたのである。曼荼羅

には種々の意味があるが、集合と本質、即ち仏の集りを示すとともに、悟りの本質を示すものであるとされていて、大乘仏教により創造された多くの仏を一なる仏、絶対の仏大日如来に統一させ、この仏の集合、仏の統一の仕方が示されている。

空海が師恵果から受けた、大日経に基づく胎藏界曼荼羅、金剛頂經による金剛界曼荼羅に示してあり、この二つの曼荼羅を一对として両界曼荼羅と称す。

この大日如来は、一切のものをはぐくみ育てる大自然の生産力の表徴としての宇宙神であり、この宇宙神は我々の生命にも潜在し、三つの形即ち、身、口、意として大宇宙の生命として現われ、それは無限に広く、深く、荘嚴なる宇宙の生命を、密というのであって、この大生命に気づいて、自己の小我えの妄執を断ち切るのが、密教修行であろう。この大生命を振り立たせて生きんとするが、真言密教の教えである。

大原郡大東町宇山田の高峯山は、山岳仏教時代には、一山四十八坊を有していたという、衰亡の末、現在の仏像は、大東町宇田中の一小



10. 大日如来像
極楽寺



11. 如来形坐像
極楽寺

堂に安置され、極楽寺の管理下にある。こうした変遷を経た仏像のためか、虫食いが多くて、いたましい限りである。

大日如来坐像は、像高一五八センチ、ヒノキ材の寄木造である。肉髻は高く、天冠をいただき、垂髪は耳におよぶ。首には三道、腕に腕釧、そして手釧をつけて、金剛界大日如来の智拳印を結び、結跏趺坐した堂々たる像である。もとは彩色像であったことが彩色の残りで分かる。衣文の彫りは浅いが流麗である。膝部は低く二一センチ、面相には魁偉さはなく、体軀も量的形成を脱し細身となつて、おとなしく、女性的な姿態である。藤原仏の特色がよく現われている。

11 12 13 如来坐像 この三軀は、ヒノキ材の内削りの像で、三軀とも同形式である。この三軀の仏像は、金剛界大日如来像を中心とする阿闍、宝生、無量寿、不空成就如来の四仏であったものが、一軀を失つて現在三軀が残存しているものと考えられる。

この三軀は、文化財指定の時の説明文には、阿弥陀、宝生、釈迦如来と記名してあるが、指定書には確証のないため如来坐像と記された。若し、私見の如く金剛界の四仏とすれば、阿弥陀は無量寿、宝生

如来はそのまゝで、釈迦は阿闍即ち薬師如来に相当する。
 三軀の像は、それぞれ偏袒右肩、結跏趺坐、そして印を結ぶ。肉髻はやや高く、肉髻珠はない、眼は彫眼であるが、大日如来像に見た正視の様相ではなく、やや下腑している。従って慈悲相である。膝部は寸法表の如く低く、膝巾も狭い。衣文は流麗で、全体からの印象は、つゝまじやかな様相で、藤原仏としての特色がある。
 残念なことには、虫食いの多いことである。

各部	像名			
	大日如来像	阿弥陀如来像(無量寿如来像)	宝生如来像	釈迦如来像(阿闍如来像)
総高	一五八、〇	八五、二	八三、〇	八六、八
髪際から下の寸法	一三六、〇	七〇、〇	六七、〇	七七、三
頭高	三三、三	一一、〇	一三、〇	一四、六
頭厚	二九、五	一九、五	一八、五	二〇、五
面長	二三、五	一五、〇	一四、二	一四、六
面巾	二四、五	一五、〇	一四、二	一四、六
肩巾	六五、〇	四〇、〇	四二、〇	四一、〇
膝高	二一、〇	一三、五	一〇、七	一〇、五
膝巾	九四、〇	六〇、〇	六〇、〇	六〇、〇
印相	知拳印	上品上生	施無畏	施無畏

(七) 美術史から見た鎌倉時代 (AD12C半～14C半)

鎌倉様式は、既に藤原時代の末期から現われている。即ち藤原時代の貴族階級の中に芽生え、且つ宋様式が流入したので、貴族対武家、

鳥根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

京都対鎌倉という二重性が考えられるが、逐次武家が勢力を得るに至って、藤原時代の女性的なるものから武家的なる男性的なるものに移行した。

それは先ず、甘美な空想的であった、藤原時代とはまったく対称的な現実主義となったことである。この現実主義は、必然的に写実主義に発展したのであるが、鎌倉時代の写実主義は、自然主義ともいふべきで、*naturalism* でなく、*naturism* である。それは自然を崇敬する態度で、自然の無限性に対し、人間の有限性を意識したことである。武家の社会では、強い、弱いということが大きな問題で、強者が世に出て尊敬されることから、人生は努力主義であると信じた。この努力主義は活動主義となり、ついに実力の世となったのである。従って実力者への思慕と尊敬は、藤原時代の家柄の尊重と対称的となったのである。かの肖像彫刻、肖像絵が、生まれたのは、この実力者に対する尊敬の思想のあらわれである。そして本時代で盛んに彫刻に玉眼(ぎよくがん)が用いられたことは、写実主義として当然の表現である。尚彫刻そのものも藤原時代の定朝様の形式が、全く無生氣なものと観られて、儀軌に許される限りの、自由で変化のある力強い表現を試みた。これには、天平彫刻の優秀さを、東大寺、興福寺の復興事業に親しく手がけて、古典美を理解し共鳴した結果と、宋様式の流入もその一因である。この彫刻の発展には運慶の出現による、慶派の存在が大きいことは衆知のことである。

以上の要因から、鎌倉時代の美的様式としては、先づ壮美が考えられる。壮美は「崇高な感じを起させる美」で、「崇高な感じ」は、逞しき、勇ましき、りりしき、男らしきであって、藤原時代と対称的な、

男性的で勇健なるもの美である。しかもこの壮美の中には、明るいユーモアな表現があることは見逃し得ない様式である。次ぎに幽玄があげられる。この幽玄とは「奥深くて、はかり知れぬこと」又は「余情のあること」と解され、いわば「遠く而して静かである」即ち「見せられているものが全てではない、見せられているものの中に見せられざるものをもつ」ということで、含蓄性であり、いわゆる「奥ゆかしさ」である。こうした様式は、多分に禅宗的世界観によるものが大きい。鎌倉仏教では、親鸞、道元、日蓮が大きく表面に出るが、特に禅宗が式士階級と密接なる関係をもつに至り、不立文字、教外別伝、直指人心、見性成佛の四つを、スローガンとして、自力によった。その思想は、本時代に於て特筆せねばならぬ。又、禅宗により、宋文化が移入され、次ぎの足利時代に於て発展し、この禅宗的、武家的世界観が、その様式を完全に形成したのである。

この鎌倉時代の様式を理解して、本時代の如来像について考察すると、次ぎの如くである。

(八) 鎌倉時代の如来像

14 木造、阿弥陀如来立像

重要文化財指定 大正九・四・一五 心覚院

心覚院は、浜田市の外ノ浦に面した寺院で、本像はこの寺院の本尊である。

この阿弥陀如来像は、像高、九八センチ、漆箔で彩色された八角形框座の踏割(踏分)蓮華座に立つ立像である。光背は、頭光と身光よりなる二重光背、いわゆる挙身光である。特にこの光背は、雲煙形の



14. 阿弥陀如来 心覚院

線が実に自然で美しく、まずその美しさに目をうばれる。寺伝によると、本像は安阿弥即ち鎌倉時代の仏師運慶の最古の弟子といわれる快慶の作となっているが、像の胎内から出た、多数の摺仏の印刷された紙の下部に、平仮名の銘文があり、その終りに「建長七年六月十八日」と記してある。慶長八年は西暦一二五五年であるから、快慶の文献上最後の嘉禎二年(一二三六年)とは、年号の差異があつて、安阿弥作とは信じ難い。しかし、本像が安阿弥様式であることには異論はない。即ちその姿態は静止的で、温和な表現であるが、その理知的で、彫刻技法の流麗な手法は、安阿弥様として心をうつ。仔細に観ると、その面相に於て、眉と眉との間は比較的せまく理知的であり、眼は鎌倉彫刻に多く用いられる玉眼が挿入されていて、髪際は、自然な波状に刻出されている。そして衣文は自然で、衲衣の薄い

感じを現わし、非常にさわやかである。

台座は、前記の如く八角框座の複雑精巧であり、蓮弁は極めて自然で、蓮華は二つからなる踏割蓮華座であって、鎌倉時代から多く用いられた台座である。

脇士は文化財の指定を受けていないが、立像の観音、勢至である。

15 銅像、阿弥陀如来立像

重要文化財指定 昭和三九・一・二八 善光寺

善光寺は松江市の湖に面した西南にあり、一碓山善光寺と称し時宗に属し、相州藤沢清浄光寺の末派である。正治二年（一一二〇一年）僧心滝（佐々木高綱）の開基創建の伝がある。本像は、もと源朝の守本尊であったが、頼朝の没後、佐々木高綱が、頼朝の夫人政子より本像を受領し、厨子とともに、これを背負って諸国を巡り、この地に足をとどめて、寺院を建立し、ついに一生をここで終えたと伝えられる。



15. 阿弥陀如来像
善光寺

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

本寺は、もと円成寺山内にあったが、寛永十年、堀尾忠晴の没後現地に移転したと伝えられる。

本堂の壇上には、開基佐々木高綱の六百年忌に作られた、高綱の木像、高綱所携の笈および厨子、高綱の後裔乃木將軍夫妻の位牌が安置してある。

本像は、金銅像で像高五三・五センチ、光背の高さは六九センチの一体（光）三尊仏である。一体三尊仏というのは、三尊仏を一つの大光（後背によって包摂する形式の像である。本像は善光寺如来と称されていて、鎌倉時代に盛んに製作された。特に本像の光背は、舟形光背で、本尊の左方には、冠の正面に如来像をつけた観音菩薩、右方には、宝瓶をつけた勢至菩薩が、おのおの胸前で、両手の掌を上下に合わせ、普通の善光寺如来脇士のかたちを示している。

主尊は、長身で、肉髻珠が光り、顔面は細長く、眦のあがった長目の両眼が刻まれ、その表情はつよく、するどいのが特徴といえる。その上、両耳の耳朶が大ぶりで、しかもそれが外方に張った形は、すこぶる古風である。肩は撫で肩で、そこに衲衣の襟が、ぬき衣文のかたちを示している。衲衣の襷は、強い襷と弱い襷をかきかねて巧みな意匠をみせている。袖は襷の両側に密着して、胴をしぼり、裾はひらき、足の甲の上に重なっている。そして下部の衲衣は、厚手で重たそうにみられる。両手先は後補である。

本像は、全身が一度に铸造されたもので、金厚は平均三ミリほどで、美事に鑿で仕上げがしてある。技術の巧妙さは、甲府善光寺像よりも優れているといわれる。台座は後補、光背には両脇士の他に、雲焰の中に七軀の化仏が、美事に配置して脇士と同じく線刻されている。

島根県に於ける如来 (Tathagata) 像の考察 (天野)

る。この技術も確かに古風である。本像は上述の観点から、善光寺如来像中でも古様の像で、鎌倉時代前期の貴重な像である。

四 あと か き

この原稿を記しながら、心の世界について考えさせられた。私達は研究を行って、これを教育現場に、充分に役立せることが第一義である。矢張り私は美術を通して、特に教養課程に於ては「美しい魂」の教育を考えていることは間違いないと信じている。坐禅の会に四ヶ所出かけ、今夏も坐禅を行い、且つ講話もした。意外に若い諸君の多いのを見て、すばらしく嬉しく思うと、ともに、若き世代の人々が、心の世界を希求しているその姿を見て、いよいよ私達も精進せねばならぬと教えられた。はじめに述べた如く、私の考えたこと、調査したことは全部が記載できなかったが、何かの参考になれば嬉しいことである。特に左記の著書を参考に研究できたことを感謝する。

主なる参考文献

- 新・仏教辞典 誠信書房
 仏像図典 佐和隆研著 吉川弘文館
 仏教美術の基本 石田茂作著 東京美術社
 仏像のみかた 倉田文作著 第一法規出版社
 仏像―心とかたち― 日本放送出版協会
 続 仏像―心とかたち― 全 右
 島根の仏像 天野茂時 島大文化研究所
 仏教 渡辺照宏 岩波新書